

Phantom Quest SpinOff-01.

[黄金バディの出会いの話]

エトオリ地区よりも更に北に進むと未開の山脈が広がる。

その高山の斜面にひっそりと存在するプラニー遺跡。古代アイレア帝国の末裔が住み着いたとされるプラニー遺跡はほとんどが石の建造物。それは漆喰を使わずに建てられており、石は計算したように正確に切り出され、積み上げられている。その見事な石壁は見る者をただただ魅了する。

魅了された青年が—…ここにも一人。

「……」

やっとの思いで辿り着いた遺跡を目の前にして、青年は何も語れなかった。

語ることができなかった。

「…ほえ…」

なんとも間抜けな声を上げてふらりと倒れることが、その青年に唯一できたことだった。

何故なら…

「おーい」

遠くから聞こえる声。

「おーい。…大丈夫かぁ」

いや、そんなに遠くはないらしい。

「おーい。俺の声、聞こえてるか？」

ぺしぺし…と頬を叩かれる乾いた音。

確かに自分の頬なのに、まるで他人事のように感じられた。

「悪い。ちょっと遠慮せずいくぞ」

ばっちーん！！

本当に遠慮なく振り下ろされたビンタは気持ちの良い音を立てた。

「ったー！！！！」

飛び起きるとはまさにこのこと。

青年は、ジンジンと痛む頬を押さえながら飛び起きた。

「…なんなんですか！？」

目の前にいるのは黒いマントを羽織った男。日に焼けた肌が眩しいほど。

「お。生きてた」

「…はぁ？」

それが、二人の出会いだった—…。

× × ×

「あのさ、その態度どうなん？って思わない？」

「…は？」

「いやだから、その態度な」

呆れたような響きの中に、どこか面白がっている自分がいることをその男自身も気づいていた。

ふう…と吐いた煙が目の中の青年の前髪を掠めて広がっていく。

眉をきゅっと顰めて、青年はいかにも嫌そうな顔をした。

それがなんだか新鮮で、もう一度ふう…と先ほどよりも多めに吐いてみる。

「…まだジンジンする」

ちょこんと体操座りをして左の頬をさする姿は滑稽だ。

「あのままぶっ倒れてたらお前確実に死んでたぞ」

「…そうですね」

「残り少ない非常食だったんだよな」

「……」

「それを見ず知らずの、それもこんな態度の野郎に分け与えるなんて…。俺って良い奴」

「……」

「おい。なんか言えよ」

「…思ったより美味しかった」

「は？」

「非常食って、初めて食べました」

「……ぶっ」

男は葉巻を啜えたまま肩を震わせて笑った。

そして居心地悪そうに体操座りを続けている青年に、大きな手を差し出す。

「…なんですか？」

訝し気に尋ねる青年の手を強引に掴むと、その力の強さに「ほえっ…」と間抜けな声が漏れた。

「俺はゼノ。みんなジーニって呼ぶ。トレハンだ」

「…トレハン？」

「トレジャーハンター。聞いたことくらいあるだろ？」

「貴重な財産を漁りまくってるのはあなたたちですか」

「ひでえ言い方だな。お宝を探し求めてるって言えよ」

「お宝って言い方、野蛮で好きになれません」

「(笑) そうかよ。…ってかさ、何か忘れてない？」

「…なんですか？」

「いやだから、俺、名乗ったじゃん？」

「そうですね」

「え…」

「え？」

男は思わず握っていた手に力をこめる。

「ったー！！ 何するんですか！！」

手を振りほどいて抗議する青年の目を、ぐいっと睨むように見つめる。

「名を名乗りやがれ。礼儀だろうが」

「…あ。そういうことですか」

「そういうことだよ！」

「…フィーネです」

「フィーネ」

「…はい」

ゼノは満足そうに煙を吐いた。

嫌味なくらい葉巻が似合うな。そんなことがフィーネの頭をよぎる。

柔らかい風が吹き抜けた。

「で？ お前はここには何しに来たんだよ？ 観光か？ こんなさびれた遺跡に一人で来るなんて物好きだな」

「プラニー遺跡には解き明かされていない謎がたくさんあるんです」

フィーネは使い込まれた手帳を開いて話し始める。

「災害に見舞われ、それまでに住んでいた土地を捨てた古代アイレア帝国の末裔がここに逃げ延びてきたとされていますが、世紀の大災害とされたデサスの危機が起きた時期と、この遺跡が誕生した時期はどうしても一致しないんです。この石壁の風化具合…、何よりこの石の断面はミーラー遺跡の農業用水路に使われている石の断面と酷似していますが、その技術がすぐに大陸に伝わったと考えても、そこには100年近くの誤差が生じます。それに…」

「ちょっと待った！！」

「何です？」

「えっと…フィーネはさ、何者？」

「何者って…？」

「職業は？」

「今は無職です。…資金を稼いでは遺跡を巡る、を繰り返してます」

「遺跡オタクか」

「否定はしませんけど…」

それ以上の抗議をしなかったのは、ゼノの目が思いのほか真剣な光を放っていたからだ。

ゼノは一つ息を吐いて、口を開く。

「なあ、このプラニー遺跡の石壁のどこかに隠し扉があるって聞いたことはあるか？」

「ドゥエリポルタはあります」

「ドゥエ…？」

「あなたの言う隠し扉のことです。『ドゥエリポルタがどこにあるのか？』…このプラニー遺跡の最大の謎と言われています。それを解くために僕はここに来たんです」

「解くために…？」

「石壁の重ね方に一定の法則があることに気づいたんです。石の断面の角度と大きさをよく見ると…」

「フィーネ！！」

「はい？」

「俺と組もうぜ！」

「…は？」

「俺の、相棒になってほしい」

「相棒…？」

「ダメか？」

「相棒って響きがちょっと…」

「は？」

「ダサいっていうか…」

「じゃあ、何ならいいんだよ」

「トレハン業界では普通なんて言うんですか？ コンビ？」

「バディ、だな」

「バディ…」

その響きに、フィーネがまんざらでもない顔をしたのをゼノは見逃さなかった。

改まった様子で、フィーネに手を差し出す。

「なあ、俺とバディ組んでくれ」

「え、嫌です」

「…へ？」

ゼノは思わずズッコケた。

「いやいや、今のは組む流れだったじゃんか」

「は？ そうでした？」

「そうだよ！」

「僕は誰かと組むみたいなのはきっと合わないと思います。それ以前に僕はトレハンじゃありませんし、どうしてあなたと」

ぐう…。

間の悪い腹の虫が鳴く。

「……////っ」

耳まで真っ赤に染まっていくフィーネ。

ゼノは、柔らかく微笑むとガサゴソと鞆を漁り、何かをフィーネに放り投げた。

「え…？」

反射的に受け取ったそれは…、非常食。

「甘い嫌い？」

「いや、むしろ好きですけど」

「じゃ、こっちの方が好みかも」

ぐう…。

「餌付けですか？」という嫌味を言う前に腹の虫がまた鳴いた。

それを掻き消すような豪快な笑い声。

「(笑) 餌付けとかじゃねえから遠慮せず食えよ」

「……」

考えを読まれている気がして少し面白くなかったが、でも、不思議と嫌な気はしなかった。封を開けると灰かに甘い匂いがして、三度目の腹の虫が鳴いた。

× × ×

「僕の計算によると、ドゥエリポルタがあるのはここです」

ゼノが持っていた遺跡の地図にフィーネが×を書き込む。

「間違いないか？」

「信じてくれないならいいです」

「あ、悪い。嫌な言い方したな。…信じるよ。ありがとう」

「……」

こんなに簡単に自分の非を認めることも、こんなに簡単に感謝を口にするのも、フィーネにとってはあまりない感覚で戸惑った。

「感謝されるのは違う気がします。僕自身が解きたかっただけですから」

「それでも助かる」

くっつく笑顔を向けられて、ますますフィーネはどう反応していいのかわからなくなった。その場から早く立ち去りたい気持ちで地図を手に歩き始める。

「ん？ どこ行くんだ？」

「ドゥエリポルタ…。行くんでしょう？」

何回目かの豪快な笑い声と、頭にポンっと乗せられた大きな手。

「？ なんですか…」

わけがわからない様子のフィーネの顔をのぞき込むゼノ。

「なるほど。そりゃ腹空かしてぶっ倒れるわけだ」

「…？」

「貸してみろ」

促されるまま地図を渡すフィーネ。

ゼノが踏み出したのは、フィーネが行こうとしていた方向とは真逆だった。

地図を見ながら進むゼノに、フィーネは何も言わずについていく。

「ずっと一人で遺跡巡りしてたわけ？」

「はい」

「すんなり辿り着けたことないだろ？」

「…だからなんですか？」

拗ねた響きを全く隠す気はないらしい。ゼノは肩をすくめる。

「だーかーらー、いちいち牙むくなって (笑) ま、イラっとさせる言い方する俺が悪いのか」
なぜだか楽しそうなゼノの声。

「…方向音痴なのは自覚してます。でも自覚したところで直るわけではありませんから」

「ガイド雇えば？」

「そんなお金ありません」

「ここにガイド兼相棒がいるけど？」

にんまり笑うゼノの真意が読めなくてフィーネはまた反応に困ってしまう。

「あの…からかってます？」

「(笑) からかってねえよ」

乾いた石畳に響く二人分の靴音。

思いのほか身軽なフィーネは、ゼノの軽やかな足取りに難なくついていくことができた。

「へえ、なかなかやるじゃん」

「茶化さないで下さい」

「だから茶化してねえってば。っんと捻くれてんなあ」

「…捻くれてるという自覚はあります」

「あるんだ自覚 (笑)」

目の前の背中がくっくっくと揺れる。

自分がついていけているのは、どんどん前に行く大きな背中がちゃんとペース配分をしてくれているおかげだということをフィーネはちゃんと知っていた。だから少し悔しかった。

たまに何でもない段差によく躓くたびに笑われ、大きな手が向けられる。

その手の揺るぎない安心感。フィーネが初めて触れた感覚。

「こっからは結構ハードだから気い付けろよ」

「わかってます」

迷路のような石の壁を通り抜ける間、しばらく続く沈黙。

だんだん荒くなってくる息。同じ目的地に向かってただ進むだけ。

沈黙なんて、お互い全く気にならなかった。

「着いた」

そうゼノが告げた時初めて、かなり長い時間黙っていたことに気づくフィーネ。

どうしてだろう。この人といると不思議な感覚に何度も陥る。そしてそれが、悪くないと思える。

「ん？ どうした？」

この優しい声の響きも。

「……あの。ガイド兼バディなら」

「…へ？」

ゼノの目が大きく見開かれる。

「えっと…フィーネ？」

「ま、まずはこのドゥエリポルタに入ってみましょう」

「…おう。そうだな」

二人の目の前には一…未知なるクエスト。

「待ってろよ。お宝」

「貴重な財産」

「お宝」

「貴重な財産」

「……」

「……」

にやりと先に笑ったのはどっちだったか……。

この二人が黄金ボディと呼ばれるのは、少し、先の話。

SpinOff- 01. fin.